建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

最優秀賞

「祖父の背中を追う私」

東海工業専門学校金山校　土木工学科１年

田端　愛穂

私は今年の四月から土木工学科に入学し、勉強をしています。そんな私が土木の道に進もうと決めたキッカケは祖父です。

小さい頃から祖父に一番性格や考え方などが似ていると家族から言われ続け、そして私自身もなぜか祖父に憧れを持ちながら生活していた部分もあり、そして高校三年間で感じたことがありました。それは、祖父がたくさんの人から慕われたり、感謝されたりしているということがまだ高校生の私でも分かるくらい感じられたのです。でもそこには、何の知識もない状態から独学で必死に勉強して資格を取り、必死に働き社長を任されるまで上り詰めた祖父自身しかわからないたくさんの努力があっての今があり、仕事以外にもボランティア活動や地域貢献、何から何まで見返りも求めず参加したり助けになったりという人柄などもすべてを含め、たくさんの人に慕われる・感謝される・認められるような存在にまでなったんだと私は思います。

そんな祖父を身近で見てきた私は、高二の頃に祖父のことを知っている数人の方と話している時「三兄弟の中で一番向いている」「土木の女社長してみたら？」などと勧められることが増え、初めはそんな外仕事したいとも思わず、女の子らしく生活していこうと思っていました。でも日に日に進路を考え出したのと同時に土木って何するのかなと考え調べ始め、祖父や知り合いにどんなことをしているのか聞いてみたりとしているうちに、祖父と同じ仕事をしてみたいと思い数ヵ月一人で考えた結果、土木の道に進むことに決めました。そして女である私は、男の世界で活躍するにはどうしても力や体力という部分で負けてしまいます。

そこで、高校三年間で調理検定１級～4級やサービス接遇検定などたくさんの検定を取得してきて資格を取る大切さを知った私は、未知の世界である土木というものを勉強し資格を取りたいと考え、たくさん学校を調べ東海工業専門学校金山校の土木工学科に辿り着きました。自分自身の考えをまとめ決心した上で、祖父と祖父の会社で事務をしている祖母・母と四人で向かい合い、ずっと考えていたことや今の気持ちと土木の道に進みたいということ、祖父の跡継ぎとして会社に入るために東海工業専門学校金山校に行きたいということなどを数か月間私の中で考えていたことや気持ちをすべて話しました。すると祖父は、家族の中に跡継ぎがもういないと考えて、やめるとなればすぐ会社をたためられるように準備を始めていたことを教えてくれました。そして、「お前が勉強して戻ってくるまで会社はちゃんと整えて守っとくから頑張って勉強してみろ。もし、ほんとに自分に向いてないと思ったり違う会社に行くとかで戻れやんっていうならそれはそれでいい。思うように一回やってみな。」と背中を押してくれて、「後継ぎを家族以外には任す気が無かったし、会社もいつでもたためるように考えとったから本当に嬉しい。愛穂が戻ってくるまでとりあえず頑張るわ。」とほんとに喜んでもらい、私もうれしい気持ちでいっぱいでした。こうして私はこの学校に入学し、今土木の分野についていろいろな知識を得て、格を取るため勉強をしています。

建設業、特に私が勉強している土木にいいイメージを持つ人やまず知っている人も少ないと思います。確かに私も興味を持つまで家族・親戚・友達に外仕事の人がたくさんいながら、詳しい作業内容やメリットなどを考えたことがありませんでした。なぜなら冬は寒いし、夏は暑い、虫もいるし、朝早くから夕方まで外での作業は大変そう、したくないとずっと思っていました。そんな大変な仕事だからこそ特に国・県・市町村からの仕事が多い土木では、いくつかメリット・やりがいがあります。その中でも私が一番のやりがいだと思うのが自分が指揮して、自分が作った構造物などが地図に載ったり、施工したものがたくさんの人の役に立つということです。それは自信をもって「これは私が作った。」といえるものであり、何より達成感・やりがいを感じられることだと思うのです。私もたくさん勉強し後を継ぎ、地図に載るものを作ることができた時には、いつか生まれてくる自分の子供や家族親戚などに胸を張って自慢したいと思っています。
でもそこまで行くにはたくさんの努力が必要です。

建設業は大変だと思いますが、楽な仕事をやりがいも達成感もなく働くより、たくさん努力しやりがいを感じられ、コミュニケーション能力を高められる仕事です。

私は、土木という仕事でやりがいを感じられるような自分を目指し、一番は祖父の土木会社を継ぐのを目標に頑張っていこうと思います。

建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

最優秀賞

「建設業で生きる」

東海工業専門学校金山校　測量設計科　１年

長谷川　翔

私の実家は、祖父の代から建設業を営んでいます。しかし、私は小学生からの夢を追い、大学で法律を学んでいました。父の経験をもとに、両親が、私の選択の自由を配慮して育ててくれたためでもあります。コンプライアンスが重要視される昨今、法学部卒という肩書には、幅広い就活の選択肢がありました。しかしながら、自分の進路を熟慮した結果、父の跡を継ぎ建設業界に入ることを決め、専門知識や人脈を育む為に専門学校に進学いたしました。

父の会社は、公共工事が中心事業であり、道路、上下水道及び河川工事等を行っております。母も、現場監督として父を支えており、両親で測量業務をすることもあります。そのため、子供の頃から、両親の仕事現場には、よく連れていかれていました。現在では、簡単な仕事の手伝いをすることもあります。

この業界は、先日も、一部メディアにて、「底辺の仕事ランキング」に挙げられて話題になったように、身体的にきつく人気の無い職業であることは否定できません。しかし、この業界に良さがないわけではなく、そうであるからこそ、私は、この業界に入ることを決めたのです。

この業界の仕事は、良くも悪くも自分たちが造り上げた成果が、道路や橋、上下水道のインフラとして多くの人々に使用され、後世まで残存することになります。父は、私に、自分が携わって造り上げた道路などを通る際、施工当時の苦労話とともに、「これは、俺が作ったんだよ。」と自慢します。その時の父は、自分の造ったものが皆に利用され続けていている様子を見ながら、それを我が子に自慢している姿が大変嬉しそうに見えました。また、父は、いつも口癖のように「今は、いいかもしれないけど、長く使われていくものだから、先のことを考えて作らなくてはいけない。」と誇らしげに付け加えます。そんな父の姿を見た私は、人に、我が子に、自慢できるこの職業は素晴らしいと感じました。

また、父の会社では、市や県及び国と災害防止協定を結んでおり、台風などの緊急時の対応をよく行っております。緊急で行うことの多い災害復旧工事は、昼夜を問わず、それを利用する人が困っているからこそ必要とされます。緊急災害復旧工事を社員一丸となって行っている最中、近隣の方々から声を掛けて頂き、感謝されている父たちの姿をよく見かけます。それは、一度や二度ではなく、ほぼ毎回といっていいだろうと思います。中には、感謝の気持ちとして差し入れを入れてくれる方もいます。人に感謝されながら仕事ができる職業は、そう多くないだろうと思います。人に感謝されることに加え、更にやりがいを感じることのできる素晴らしい職業であると私は思います。

そして、自然の中で仕事ができることも良さの一つだといえます。私の地元は、盆地で山々に囲まれているために、毎回とは言えないものの、自然の中で仕事をすることが多いのです。デスクワークは、パソコン作業が得意なので好きではありますが、一日中、机に座り続け、常にパソコンと向かい合うことは、退屈で仕方なく感じます。そのため、私は外に出て自然に触れることのできる仕事に就きたいとも考えていました。建設業界であれば、それぞれ各人の仕事の内容次第ではありますが、私に関しては、おそらく、内業と外業の作業の割合は半分半分になると思われます。室内外で仕事をして、現場が工事ごとに変わり、山や川などの自然に触れることが出来ることは、仕事環境という面で、退屈さを感じずに新鮮に楽しく仕事ができると考えられます。また、未だ終息の見えないコロナ社会である現在、他の職業と比べ、人との接触が少ないことは、コロナ感染予防という面においても良い職業であると思います。

最近では、作業環境を良くするための技術の進歩が多くみられます。父の会社でも、ICT施工を行っており、一人で測量が行うことができるトータルステーションを導入しています。また、作業員全員に熱中症対策の為に、冷房ファンジャケットの支給を行い、休憩時には、バッテリー型冷蔵庫を用い、キンキンに冷えた飲料水の支給を行っています。父によれば、デジタルカメラの進歩だけでも、管理業務が大変軽減したそうです。日々進んでいく技術の進歩とともに建設業における負担は軽減されていっているのだと思われます。

これから、ドローン測量といった最新の技術や知識を含め、専門知識を蓄えて、現場での経験を多く積み、私もいつか、父のように我が子に対して、自分の造った構造物を誇らしげに、そして、父と共に自慢する日々が来ることを楽しみにしています。

建設系専門学校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部

優　秀　賞

「底辺と呼ばれる職に就くワケ」

東海工業専門学校金山校　土木工学科　1年

近藤　幹大

私が建設業界に入ろうと決めた大きな理由は、家族が建設会社を営んでいてその内容に関心を持ち、会社を継ぎたいと考えたからです。

小さい頃から父や祖父が働いている現場を見ることがありました。当時は特に考えることや分かることもなくただ大きな機械を動かせてかっこいい、楽しそう、くらいのことしか思っていませんでした。

それから、私は中学生になり職場体験で父の現場に行きました。そこで私は土木の現場がとても繊細な作業で成り立っていると知りました。たった数ミリのズレであっても現場に大きな影響を与えてしまう。しかも、重機や重い材料を扱うため自分の命にも危険が生じる可能性もあります。そんな仕事を続ける理由を過去に一度父に聞いたことがあります。そのとき父は、自分がした仕事が地図に形として残ることでやりがいを感じることが出来るから、と言いました。そして私はそんなやりがいを感じることが出来る仕事をしてみたいと思い、この業界に進むことを決めました。

そして今は、現場監督として働くための資格を取るために学校で勉強をしています。でも、土木工学科として、私と一緒に勉強をする人は私を含めて三十人しかいません。建設業界全体で見ても、今この業界の実態としては、深刻な人材不足に陥っていると聞きます。

だからこそ、いま資格を取ることはとても大きな意味を持っていると私は考えています。

ですが、そんな状況を後押しするかのように建設の仕事には、悪いイメージがついてしまっています。汚い、危険、かっこ悪い、などの言葉をよく耳にします。汚い、危険、については、そのとおりであり私自身もそう思ったことがあります。ですが、かっこ悪い、という言葉については私は間違っていると思います。土まみれで汚かったり、作業内容が危険と隣り合わせだったりすることを自分がすることによってたくさんの人が使う道路や水路ができる。自分が汚く危険な作業をしてまで人のためになることをする。私はこれ以上にかっこよくて誇ることが出来る仕事を知りません。

そして、建設業には魅力もたくさんあります。私が感じる魅力は大きく分けて四つあります。

一つ目は、やりがいと達成感を感じられることです。一つの工事で大きなものを作ることもあるので作業量が増え大変なこともあると思います。しかし、その分達成感を感じることができ、それがやりがいになっていくと思います。

二つ目は、季節の流れを感じられることです。屋外での作業がほとんどなので、一年を通して季節や景色の変化を感じることができます。仕事をしながらそのようなことを感じられるのは、建設業の大きな魅力だと思います。

三つ目は、人脈が広がることです。現場によっては他の会社の人と仕事をすることもあります。そんな人と一緒に作業をする中で、会話が生まれ徐々に関係が広がっていき次の仕事などにもつながっていくと思います。

四つ目は、建設での知識が私生活でも生かせることです。作業の仕方や機械の使い方などは、今流行っている DIY などでとても役に立ちます。また、図面の書き方や CAD の使い方も，ものづくりなどに役立ち生活を豊かにしてくれるでしょう。

このように、建設業には他にはないような魅力がたくさん詰まっています。そして、今建設業に携わっている人も新しい仲間との出会いを待っています。私が、親が仕事をする姿に憧れたようにこの業界に入ったのには人それぞれ理由があると思います。作るものや作業の内容は同じであり、建設物を現場でチームとして作っている姿はとてもかっこいいものです。どんな理由であっても同じ業界で働く人は皆同じ仲間だと私は思います。

私は、この二年で建設のことをたくさん勉強して将来社会に貢献したいです。そして、この文や気持ちが誰かに届いて、私が現場で働く時の仲間が、一人でも増えることを祈っています。